TOPICS

患者会の劇団活動でいきいき

生きがい療法を実践する

松尾クリニック（大阪府八尾市）の取り組み

大阪府八尾市にある松尾クリニックの患者会の劇団「松ぼっくり」。活動を通していきいきしてもらおうという、生きがい療法での活動を始めた劇団である。その松ぼっくりが、このたび八尾市文化会館小ホールで初公演を行った。松尾美由起院長による劇団運営の裏話を交えながら、公演当日の模様をお伝えする。

互いの体調を気遣いながら

1992年7月16日、八尾市の松尾クリニック（循環器・消化器・理学療法・内科）に通院する患者たちが結成する劇団「松ぼっくり」が、旗揚げ後初の公演を行う日がやってきた。

公演前の楽屋を訪れた。15畳ほどの和室で待機している劇団員は、着替えや化粧をしながらも和気あいあいとした雰囲気。廊下では最後の台本の読み合わせをする劇団員もいて、練習の仕上げに余念がない。午前の部を済ませ、午後の部の開演を待つひとときだ。

といっても午前の部はパンフレットにも記載されていない。入場整理券が700枚も出たため、急きょ設定されたのだ。午前の部には約160名の人が入場し、午後の部もホールの収容人数（300名）に近い入場者が期待される盛況ぶりである。

昨年（1991年）10月、松尾クリニックの患者22名と同院スタッフ、ボランティアたちで「松ぼっくり」は結成された。何しろ初心者ばかりである。見よう見まねで練習が始まったが、「体調が悪い」などの理由で欠席者が出てなかなか人数が揃わない。最初週2回だった練習日を週1回にした。欠席者をカバーするため一人2役、3役で練習をこなしてきた。「ゆっくりいこう」と、4月公演の予定を7

松尾美由起院長（右）と
脚本を担当した放送作家の篠崎博氏

月に延期した。幾多の困難を乗り越え、晴れて公演初日を迎えたのである。

今回上演される『桜屋敷』は、かつてＮＨＫテレビで放映された作品で、八尾市が舞台となる人情話だ。せっかくやるなら本格的にと脚本は本作品の筆者であり放送作家の篠崎博氏に依頼した。また、医療に関心が高まるような要素をストーリーに盛り込んでいるのも同劇団ならではの特徴だ。

患者の顔がみるみる若返る

「松ぼっくり」の活動を後押ししてきた松尾クリニックは、大阪市の南に隣接する八尾市の繁華街の中にある。河内地方として知られる、人情に厚い土地柄である。

松尾クリニックでは、次の３点を医療理念の柱としてきた。一つは高度医療。専門である循環器系の治療に関しては高度な医療を提供していこうというもの。次に在宅医療。1985年の開院と同時に訪問診療を、翌年からは訪問看護を行ってきた実績がある。そして生きがい療法。「松ぼっくり」の活動もその一貫で、これら生きがい療法の核となっているのは、同院に自然発生的にできた『松樹会』という患者会（会員250名余）だ。『病気や治療についての勉強会』という例会を年に４回を開いているのをはじめ、精神的な交流と手先の訓練のための様々な教室（七宝焼、書道、手芸）を行っている。

同院の松尾美由起院長は演劇を生きがい療法に導入したいきさつと、演劇がもたらした効果について次のように語る。

「諸活動よりもう一歩進んで、病気や治療、リハビリ、ソーシャルワーカーなどについて、もっと身近にもっと印象的に患者さんに理解してもらえる活動はないかと考えたとき、演劇という手段を思いつきました。

練習を始めて分かったのですが、演劇というのは頭の訓練に非常にいいんですね。台詞は暗記しなければならないし、もし相手が違う台詞を言ってしまった場合、アドリブでつじつまを合わせなくてはならない。さらに感情や動きを効果的に入れなければならないし、大きな声を出すための腹式呼吸の訓練も必要になります。

興味深いのは、この活動を始める前の写真と見比べると、皆さん確実に若返っているんです。見違えるほどいきいきとした顔になっているんですね。これこそ生きがい療法で私たちが求めている目的だと言えるでしょう」

"療法"の域を超えて

午後の部の公演は18時30分に開演した。

発声練習の賜のなめらかな台詞まわし、演者の豊かな表情などが観客を芝居に引き込んでいる。大阪らしく場面の端々に笑いのエッセンスが盛り込まれていて、たびたびどっと笑い声が会場をつつむ。客席はほぼ満席だ。

『桜屋敷』は、"桜屋敷"と呼ばれる邸宅に住む元大学教授が心筋梗塞で倒れ、回復した後、屋敷を町の人に残して町を去っていく過程に様々な人間模様が描かれている話である。

途中演劇が一旦中断され、松尾院長による心筋梗塞の治療法の解説がスライド映写を使って行われた。日頃触れる機会の少ない治療法の詳しい図解に、観客たちは見入っていた。

劇のフィナーレには出演者全員が河内音頭を輪になって踊り、これに会場の飛び入りも加わってにぎやかな幕切れとなった。カーテンコールで舞台に一列に並んだ出演者には、長く惜しみない拍手が送られ、出演者も最高の笑顔でこれに応えた。「松ぼっくり」公演は「療法」の域を超えて地域文化の結実を感じさせる、充実した公演となった。